

京都府京都市教育委員会

【総人口】1,437,853人

【自治体 関連URL】 <https://www.city.kyoto.lg.jp/kyoiku/page/0000317791.html>

【主担当部局】京都市教育委員会学校指導課
(公立幼稚園担当)

【主な関係部局】京都市教育委員会学校指導課
(公立小学校担当)

京都市子ども若者はぐみ局
幼保総合支援室

(公営保育所・民間保育園・私立幼稚園担当)

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	1	15	84	13	209	0	66	2	158	9
園児・ 児童数	96	676	8,668	952	19,514	0	8,381	1005	57,984	3495

事業実施地域・ 協力園校	【実施地域】
	【協力園校】 幼：公立幼稚園3園、私立幼稚園2園、公立保育所1園、私立保育園4園、 小：公立小学校14校

架け橋期の カリキュラム開発 会議	【会議委員人数】 17名	【開催数】 3回
	【委員属性】 公立幼稚園関係団体1名、私立幼稚園関係団体1名、私立保育園関係団体2名、公立小学校関係団体1名、教員養成大学教授2名、公立小学校3名、保護者関係団体2名、市小学校担当者3名、市幼稚園担当者1名、幼児教育センター1名、	

架け橋期の コーディネー ター等	【配置人数】 9名
	【経歴】 ・教育委員会教育職6名（小学校籍3名（うち専任1名）、幼稚園籍3名） ・有識者3名

架け橋期の カリキュラム	【開発主体】 Aブロック（1公立小学校、1公立幼稚園、1私立幼稚園、1私立保育園） Bブロック（1公立小学校、1公立幼稚園、1私立幼稚園、3私立保育園） Cブロック（1公立小学校、1公立幼稚園、1公立保育所）
-----------------	---

カリキュラム開発会議

… 京都市では、「京都市架け橋会議」と呼称

【架け橋期のカリキュラムに関する議論】

- 3 研究ブロックでのカリキュラム作成：幼保小が互いの違いを感じ、子供の姿を語り合い、共通の視点を持ち、他校園からの意見で互いに問い直しながら、ともに納得し、実践につながるカリキュラムを作ることを目指すとの示唆
- 3 研究ブロックでのカリキュラムを使った実践：実践を見合う合同研修、架け橋期の子供の交流、幼保小での授業づくり等の実践を重ねたカリキュラムマネジメント実施に関する報告、研究の方向性への示唆
- 「架け橋期のカリキュラムのモデル例」の作成：3 研究ブロックでの研究を受け、R7年度からの全市展開を目指して、R6年度に「架け橋期のカリキュラムのモデル例」（京都市版）を作成することを決定。

【会議設置による成果と課題】

① 成果

○ 架け橋プログラムの全市展開に向けた方向性の確認

- ・ 会議に参画する幼保小や保護者団体への意見聴取、幼保小連携・接続に対する意識や意義の確認により、本市方針の検討と方向性の確認・決定
- ・ 架け橋期の子供にとってふさわしい教育（主体的・対話的で深い学び）の共有

○ 3つの研究ブロックの調査研究内容の理解と研究の方向性への示唆

- ・ 研究ブロック校のスタートカリキュラムの参観と小学校の入学期の取組を理解し、改めて架け橋期の子供の学びについて協議
- ・ 研究ブロックの先進的な架け橋プログラムの取組について成果・課題を確認し、本市の方針を協議・検討

② 課題

- ・ 会議に参画する幼保小それぞれの立場があり、架け橋プログラムの意義への理解はあるが、幼保小連携・接続への取組実施状況に差がある。例えば、お互いの勤務時間の問題などから、幼保小が研修やブロック会議等に一堂に集合するのが難しい実態を解決するため、私立幼稚園、民間保育園の保育者が参加しやすい研修制度・方策についての検討（保育士等キャリアアップ研修の活用について模索・検討）を進めているが、すべての校園所に有効な手立てを確立するには制度等を含め様々な課題がある。

架け橋期のカリキュラム

【架け橋期のカリキュラムの開発プロセス】

○3研究ブロックでのカリキュラム開発

特徴の異なる3つの小学校区において、それぞれの実態に応じたカリキュラム開発に取り組む。各ブロックで「思考力」「すすんで学ぶ」「つながり」等共通の視点を作成し、幼保小の連携主任が回を重ねて検討したり、幼保の管理職や連携主任が話し合い、幼保での言葉の使い方の違いを知り、言葉を吟味するなどの協議を行い作成している。

○相互理解のポイント：互いの保育、授業を見て語り合うこと

保育…小学校教員が、5歳児の発達を知る、保育者の言葉かけや環境の設え方を授業に活かす。

授業…幼保の教員が、小学校授業が「座学」「教える」から大きく変化していることに気付く。

⇒「架け橋期の主体的・対話的で深い学び」を幼保小で目指し、保育・授業改善を意識した取組へ

【架け橋期のカリキュラムの概要】

今まで作成してきた接続期カリキュラムとは違い、3ブロックともに「架け橋期」を意識した2年間のカリキュラムを作成している。それぞれの発達を見据えつつ、5歳児は1年生へのつながり、1年生は、幼児期とのつながりと2年生への発達のプロセスを見通したカリキュラムの開発を目指した。

【架け橋期のカリキュラムの実践による変容】…研究ブロックへの経年変化調査（2年目）分析から

○教師の変容 ⇒ 教育の質の向上につながる変容

・連携・接続に取り組んで良かったことについて全ての項目でR4年度より効果があったと回答する割合が増加。「授業の見直しにつながった」「幼児期の育ちを小学校教育に活かす」「架け橋期の発達を知り指導に活かす」の項目が特に大きく上昇した。

○子供の姿の変容 ⇒ 子供たちの主体的・意欲的に学ぶ姿勢

・連携・接続に取り組んで良かったことについて全ての項目でR4年度より効果があったと回答する割合が増加。「異年齢の子供や友達とかかわる力」「子供の学習意欲の向上」「主体的に小学校生活に取り組む」の項目が特に大きく上昇した。

○研究ブロック校は、先進的な取組を展開し、その実践が教育・保育の質向上につながっている。

架け橋期のカリキュラム

【架け橋期カリキュラムの実践～Aブロックのカリキュラムマネジメントの実践例～】

（研究主題）「人・もの・ことを大切に未来に輝く子ども育成」～感じ、考え、思考する そして論理的思考へ
 〈2年次の目標〉

- ① 幼保と小 ⇒ 交流から **接続** へ
 （園の活動 ⇄ 教科等つながり）
- ② 2年間の子どもの育ちを
 ⇒ **具体的な姿** で理論的な **理解** へ
 （ドキュメンテーションの作成）
- ③ 発達段階に合わせた **思考の深まり**
 ⇒ **環境構成** の具体と教師の **声かけ**
 （ドキュメンテーションと共に）

実際のカリキュラムマネジメント例

- P 1年次に作成した架け橋期のカリキュラム
- ↓
- D 実践に基づいたドキュメンテーションの作成
- ↓
- C ドキュメンテーションに基づき言葉の変更や追記
 新たなキーワードの導き出しと四角囲み
- ↓
- A 新たに実践を重ねる（3年次）

【新たに導き出したキーワード】

【子ども達の経験・遊び】

葛藤 刺激 **満足感** **達成感** **協同**
 小学校との共通点

【思考力を育む先生との関わり】

共感 期待 安心 **見守り** イメージの共有
 アイデアを生かして いままでの経験

【思考力を育む環境構成】

試行錯誤 **遊び仲間の拠点**

実践事例【紙飛行機で遊ぶ】（5歳児）



“自分の思考を共有したい”という“ねがい”であり、同時に**友達**の思考も互いに共有しながらともに進めている。それは、5歳児の10月だからこそ**友達関係**の広がりがあり、ともに思考を楽しむ姿である。

架け橋期のカリキュラム

【地域ぐるみで進める幼保小連携・接続の京都モデルを目指して】

○京都市の実態と令和6年度の取組

京都市立小学校158校、市立幼稚園15園、私学幼稚園84園、市営保育所13所（1所休所）、民間保育園209園、認定こども園66園という実態があり、全市に架け橋プログラムを広げていくために以下のことに取り組み始めている。

①小学校とその小学校区に所在する幼保との連携・接続を原則とする方針の打ち出し

1 小学校に平均19園の幼保からの入学（幼保は10校への就学）という実態から、**連携・接続する幼保小のマッチング**が必要。

②子供の育ちを支える**新たなコミュニティの構築**

架け橋期のカリキュラム作成ありきではなく、立場のちがう大人が架け橋期の子供のために、子供の姿から**「目指す子ども像」「そのための協働」**を語り合う組織づくりを推奨。

③**「架け橋プログラムの手引き（京都市版）」の作成・配布**

架け橋期の「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、保育や授業の改善と幼保小の接続を目指すための**「京都市版のフェーズ」「架け橋期のカリキュラムの解説」「架け橋期のカリキュラムのモデル例」「幼保小接続の年間計画例と実践例」**等を開発し、**手引き**として提示。

入学3日
目の様子
安心から
始まる遊
びの環境



幼稚園での色水遊び

図画工作「カラフル色水」



↓交流活動「秋見つけ」



生活科「だいすきごしょのもり」↑

次年度への展望

【成果と課題】

○**組織づくり**：子ども若者はぐくみ局との連携強化、京都市架け橋会議の充実、幼保小の架け橋コーディネーター（R5から小は専属）の設置等により、組織強化と着実な進展が図れた。

○3研究ブロック（R4～）と11実践研究校（R5～）の実践

- ・研究ブロックによる架け橋期のカリキュラムの検証と改善。
- ・連携接続の具体的取組（保育・授業の公開、幼児・児童の交流、合同研修会、半日入学・入学式の工夫、スタートカリキュラムの充実など）の実施と発信が進展。
- ・幼保小連携・接続主任の設置に向けて、その役割と効果の検証。

○自治体の取組

- ・全校、実践研究校、ブロック校対象のアンケート調査実施と分析
全市の取組状況の明確化。研究実践が進むほどに、架け橋プログラムの目指す保育・授業の改善（主体的・対話的で深い学び）への意識の高まり、子どもの変容を確認。
- ・全校の「教育指導計画書」へ連携・接続の取組記載（必須）により、各校への意識づけ。
- ・研修の実施（管理職悉皆研修・幼保小合同研修）、保護者向け子育て講座、「架け橋通信」の配信による、子どもを取り巻く教師、保護者などへの啓発の推進。

●**課題**：架け橋プログラムの趣旨を理解し、各小学校区で**幼保小のコミュニティーを構築し、全市に広げていくこと**、子ども若者はぐくみ局所管の幼保への啓発と参加しやすい体制づくり

【次年度への展望】 R7年度からの全市展開に向けた取組（○新規事業 ■継続事業の主なもの）

○**架け橋プログラムの手引の作成**（架け橋期のカリキュラムモデルの提示と年間計画モデルの提示）

○公立幼小に**幼保小連携・接続主任の設置**と民間の幼保を含む**全市連携主任・窓口担当者一覧の作成・配付**

○連携・接続主任研修会の実施 ○**京都市架け橋シンポジウムの開催**（令和7年2月予定）

■京都市架け橋会議での「京都市における幼保小連携・接続」の方針の策定と改善 ■架け橋通信の継続配信

■公立幼小への架け橋プログラム実施状況調査の実施と分析 ■保護者向け子育て講座の継続

■各種研修の継続 ○就学前施設に向けた現在の小学校教育の実態や目指す教育についての理解啓発